
紀行・随筆

付＝初期習作

阿川弘之自選作品——X

新潮社版

阿川弘之自選作品

X

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan, 1978.



紀行・随筆 きこう ずいひつ 付 初期習作		昭和五十三年六月二十日印刷	昭和五十三年六月二十五日発行	著者 阿川弘之 (あがわひろゆき)	発行者 佐藤 亮 一	発行所 株式会社 新潮社	郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一	電話 業務 〇三六五 編集 〇三六五 五四二一 振替東京四一八〇八	印刷所 二光印刷株式会社	製本所 新宿加藤製本	定価 二七〇〇円
--------------------------------------	--	---------------	----------------	-------------------	------------	--------------	----------------------	-----------------------------------	--------------	------------	----------

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

紀行

隨筆

初期習作

作品後記

初出と初収録

年譜

5

99

303

381

388

392

阿川弘之自選作品
Ⅹ

紀

行

目次

私のソロモン紀行

ゴア紀行

ビキニ紀行

私のソロモン紀行

眠つてゐるうちに赤道を越したらしい。

窓から射しこむまぶしい朝陽に眼をさまされて下を望むと、赤ちやけた何とも広漠たる大地がひろがつてゐた。初めて見るオーストラリアである。

その広漠とした大地の上、三角定規の形をしたのや矩形のや、正しく大きな幾何学的模様があちこちに見える。自然のものではあるまい。何か分らないが、人間の拓いた農園か牧場のやうなものにちがひない。

飛行機は高度を未だ二万何千フィートかに保つてゐるはずで、この高さからこれだけ立派に見える幾何学模様はよほど広大なものだ。聞くところによると濠洲の面積はアメリカ合衆国のそれとほぼ同じ、そして総人口は東京の人口より少ない。一つの牧場がベルギー一国と同じ規模のもの

があるさうだから、多分さういふ大牧場群なのであらう。

しかし人の住む気配はほとんど感じられない。まれに下界に戸数にして十戸か二十戸かといふ程度の小村落があらはれ、交通は飛行機に頼らざるを得ないと見えて村はづれに飛行場が見える。そしてあととはまた、広々漠々たる赤ちやけた大地である。

山に山火事を見る。墨絵の朝霞のやうに、白い煙が山や谷を縫うて何十キロもの先まで流れてゐる。どうせ何ヶ月も、もしかすると何年間も燃えつづけてゐるのだらう。

これで、あと一時間ほどでほんたうにシドニーといふ近代的な大都市が眼の前にあらはれて来るのかしらといふ気がする。

しかし飛行機の高度は下がりはじめ、間もなくロンドン郊外によく似たシドニーの住宅街らしきものが見えて来た。

きのふ(十一月二十日)の朝、冬の近づいた東京を出て、今、南半球のシドニーはもう夏が来るところで浜では人々が泳いでゐた。

私の今度の旅の目的地はニュー・ブリテン島のラバウルとブーゲンビル島、英領ソロモン群島である。赤道近いこれらの島々を訪れるには、現在のところ一旦南緯三十四度

のシドニーまで下がつて来なくては飛行便が無いので、やむをえずかういふ飛び方をしてゐる。

何故私がソロモン群島への旅を思ひ立つたかといふと、昨年山本五十六元帥の伝記小説を私は書いた。

当時の聯合艦隊司令長官山本五十六大將は、昭和十八年四月三日の朝、内南洋トラック島の泊地にゐた旗艦「武蔵」をあとにして幕僚たちと一緒にラバウルへ飛び、ガダルカナル島総攻撃の「い」号作戦の期間中、連日ラバウル海軍航空部隊の出撃を見送つて約二週間をラバウルで過ごした。そしていよいよ明日はトラック島の「武蔵」へ帰還するといふ四月十八日、ラバウルから日帰りの予定で最前線のブーゲンビル島ブイン、バラレ、ショートランド方面の視察激励に出かけてアメリカのP38戦闘機隊の待ち伏せにあひ、ブインの近くのジャングルの中に撃ち落とされて戦死したのである。山本の死は、潜在的には自殺であつたとも言はれてゐる。

私はかういふことをいろいろ本の中に書いたけれども、実はこの方面のことを何も知らない。南洋へ行つたことがない。

いづれ改訂版を出さねばならぬ時が来るかもしれないし、私は山本長官終焉の地を自分の眼で見て来なくなつたのであつた。

ただし私は遺骨収集団ではないから、さういふたぐひのことは全部失礼して、幸ひに山本さんの死んだ海や森を眺めることができたなら、あとは一人でのんびり南太平洋の旅を味はつて来ようと思つてゐた。

ところが出発の直前になつて、私の旅行のことがちよつと新聞に出た。すると意外な反響があつた。

おそらく私が世界の何処へ旅に出ると言つても、我が家の電話がこんなに次から次へと鳴りつづけるといふやうなことは起こらなかつたであらう。私はびっくりした。

ある人は少し興奮してゐた。私の海軍時代の同期生の某は、

「ラバウルへ行くんだつて？ 俺たちラバウルにゐた連中で作つてゐるラバウル会といふのがあるんだ。俺たちに黙つてラバウルへ行くなんて、そりや貴様少しひどいぢやないか」と言つた。

座談会で会つた運輸省航空局の某氏は、

「ラバウルへねえ……。私は満洲航空の残党で、当時満航の一部がそつくりラバウルに移つて、終戦まであすこにをりました。さうですか、ラバウルへ……。どうかラバウルによろしくと言つていただきたい気持です」

さう言つた。

「恋しラバウルの島々見れば」といふ歌は知つてゐるが、

ラバウルといふのはそんなにいい所なのだらうか？

たくさん掛かつて来た未知の人からの電話の中で私がつとも興味を惹かれたのは、芝赤羽のSさんといふ人のそれであつた。

「ラバウルからソロモン群島方面を旅行なさるさうですが、山本元帥の飛行機の落ちた場所がお分りですか？」

とSさんは聞いた。

「分りません」と私は答へた。「地図と当時の資料とで大体の見当はつけてゐますが、深いジャングルの中らしいので、其処までたどりつくことは実際にはちよつとむづかしいだらうと思つてゐます」

「あちらの土民は一般に短命ですから、果して今生きてゐるかどうか分りませんが、それではブーゲンビル島のブイに着かれたら、ポーバケといふ名の酋長をさがしてごらんになることをおすすめします」

Sさんは言つた。

Sさんは当時ブーゲンビル島に駐屯してゐた都城歩兵第二十三聯隊の主計大尉であつた。S元主計大尉の話はかうである。

土民の年は分りにくい。聞いても、「この木と同じくらい」といふやうなことを言ふ。ポーバケ酋長はしかし、そのころ未だ三十にはなつてゐなかつたと思ふので、現在も

し生きてゐればおよそ五十何歳かのはずであらう。ポーバケは当時桃太郎プランテーションといふ日本軍の農園に、土民の労務者を供給する親分の役をしてゐた。

四月十八日の朝、S主計大尉はキエタの歩兵第四十五聯隊へ計理事務の打ち合せに行く途中、ミオ川の近くのジャングルに大きな飛行機の墜落するのを目撃し、のちにそれが聯合艦隊司令長官の搭乗機であつたことを知つたが、ポーバケ酋長は日本の陸海軍双方から出されたどの捜索隊よりも先にその墜落現場へたどりついた男だと承知してゐる。もしポーバケにあふことができたなら、きつと彼はそこへあなたを案内してくれるであらう。

それから酋長ポーバケは、私(Sさん)の名前も必ずや記憶してくれてゐるものと信じる。何故かといふと、彼らの社会でよその部落の女と自由恋愛に陥ることは、少なくとも当時はきついタブーであつた。ところがある時ポーバケがとなり部落の未亡人に懸想をしひよんな仲になつて、となり部落の男たちから殺されさうになつたことがある。その時私は皇軍の威光を笠に着て仲に立ち、向うも独り者なのだしまあまあさう野暮なことを言ふなといふわけで、ポーバケの恋をまとめてやつたことがあるのだから、僭越ながら自分はポーバケ酋長にとつては月下氷人のやうなものだと今も思つてゐるのであると――。

私は持つて行くノートのほしに、
「ブインの近くの部落に住む酋長ボーバケ」と書きとめて
おいた。

シドニーに二日ゐてアンセット・アナ航空のラエ行に乗
つた。飛行機はロッキード・エレクトラである。この飛行
機の乗客の中にメラネシア人の牧師が二人ゐた。そんなこ
とを思つては悪いが、人食ひ蛮人の仲間を初めて見たと私
は思つた。ただ、色が黒く背が低く髪がちぢれてゐてメラ
ネシアだといふことは推察がつくが、それがバブアなのか
ニューギニアなのかそんなことは私には分らない。

大体これから行く先の土地の事情といふものは、未だほ
とんど分つてゐない。白カラーの黒い牧師さんから全体を
想像するわけには行くまいと思ふだけである。

日本を發つ前に、本を読んだり人からいろいろ話を聞い
たりしたが、まことに美しいのどかな所のやうでもあり、
相当覚悟を要する大変な所のやうでもあつて、見當がつか
なかつた。

『ソロモンの花嫁』といふ本がある。

これは一九一二年といふから今から五十四年前、日本流
にいつて大正元年、ジョンソンといふアメリカ人の夫婦が

人食ひ人種の実際に人を食つてゐる情景を写真にとらうと
いふ目的でソロモン群島の旅に出た話である。これを読む
とジョンソン夫妻はアメリカを發つ時友人たちから、可哀
さうに彼らもたうとう気が狂つたと思はれるか、どうせ生
きては歸つて来ないと思はれるかどちらかであつたといふ。
夫のマーチン・ジョンソンはこの瘴癘しょうれいの島々で長い苦勞
の末、つひに望みを達して食人蛮の人を食ふ現場を写すこ
とに成功し、生きて歸つてたくさんの写真を発表し、妻の
オーサ・ジョンソンは旅行記を書いた。それが『ソロモン
の花嫁』で、藤原英司氏の邦訳がある。

ソロモン群島のことをこの本には、「バケモノの島」だ
と書いてある。猫ほどの鼠がゐたり、羽の生えた蛇がゐた
り、鳩の群が飛んで来ると思ふとそれが蝶であつたり、土
人が八つくらゐの潰瘍だらけの自分の娘を、

「コノ子フットッテ美味シイ。タバコト交換シヨウ」

と売りに来たり、巨大な人食ひ鯨を見たり、数々のタブ
ーがあつて、うつかりそれを犯せばいつ毒矢や毒槍でやら
れるか分らないといふやうなことが書いてある。マラリヤ
と黄痘とはソロモン暮らしの人間の烙印だとも書いてある。

群島の名は、十六世紀の探險家がソロモン王の榮華を夢
みて名づけたのださうだが、なかなかそんなロマンティッ
クな所ではなささうであつた。

五十年の間にどのくらゐひらけたか知らないが、アフリカの観光地や、同じ南太平洋の島でもタヒチやトンガを訪れるやうなつもりで旅するわけにはゆくまい。

私の友人たちも、マーチン・ジョンソンの友人と同じやうなことを言つた。

「どうせ奴らは日本人に恨みを持つてゐるにちがひないから、お前酋長にベロリと食はれてしまふぞ」

正直な話私はあまりいい心持ではなかつた。

シドニーを出たアンセット・アナのエレクトラは、ブリスベンに寄つてそれから夜通しでポート・モレスビーへ飛び、ラエまで行く。

朝が来て眼をさますと、下に青い蠟を塗つたやうな海が見えてゐた。珊瑚海である。

「たうとう日米海軍の古戦場にやつて来た」

といふ思ひがあつた。

昭和十七年の五月、井上成美中將麾下の空母「瑞鶴」「翔鶴」がこの海域でアメリカの航空母艦「レキシントン」「ヨークタウン」の二隻とわたりあひ、「レキシントン」を撃沈したのが「珊瑚海海戦」で、合衆国海軍は今、この戦ひを記念して新しい空母の一隻に「コーラル・シー」(珊瑚海)の名を冠してゐる。

やがて飛行機は綿菓子のような雲の中に入り、下に緑の

珊瑚礁が見えて来て、ポート・モレスビーに着陸すると、朝の六時といふのに空気はむッと異様に暑かつた。

顔に入墨をして、鼻も口も厚ぼつたく、髪はちりちりにちぢれ、掌と足の裏だけ白い、人を食ひさうなのがうようよゐる。それが皆はだして、飛行機の荷下ろしや給油作業をやつてゐる。

一時間ほどで出発すると、すぐスタンレー山脈で、飛行機で飛ばすラエまでわずか四十分だが、ここは当時日本軍がポート・モレスビーへ、ポート・モレスビーへと空しく苦しい死の進撃をした山である。深い緑の峯々の間を、ほそい川が白く泡立ちながら流れ落ちてゐるのが幾本も見えた。おそらく遺骨収集団も足を入れなかつた山中に、日本兵の骨が今でもたくさん散らばつてゐるであらう。

そろそろ物騒な所へ乗りこむことになるぞと思つてゐた私はしかし、ラエに着いて少しく勝手のちがふことを発見した。

そこは小さな田舎町にちがひはないが、花が咲きみだれ、飛行場も市街もまことに清潔である。おまけに私はラエの飛行場で、たまたま一人の日本女性を見出した。

ユーイング夫人といつて福島県の出身、オーストラリア人のユーイング氏と結婚し、此の地に来てゐるたつた一人の日本人ださうである。

初めはお互ひ中国人かと思つてゐたが——何しろ華僑はどこにでもゐるので——、日本人と分つて私は飛行機待ちの間、ユーイング氏の家に連れて行かれつめた物の馳走になることになつた。

途中十八ホルズの立派なゴルフ場があつて、ラエに入港中の日本の貨物船の船員が四人、ゴルフをやりに来てゐた。人家はまばらだが、通りにはハイビスカスやポインシアナ(ほうわう木)の真紅の花、テンブル・フラワールの香りの高い白い花が咲きそろひ、私はいささか狐につままれたやうな氣持になつた。

「なかなかいい所でせう？ わたしも初めはどんな蕃地へ連れて來られるのかと思ひましたけど」

と、ユーイング夫人は話した。

町の人たちはみんな識り合ひらしく、ユーイング夫人も、白人、中国人、土民、誰とでも氣さくに挨拶をかはしてゐる。夫のユーイング氏は政府の役人で、日本からの遺骨収集団は皆この夫妻の世話になつたらしい。

これから先もこのラエみたいな所ばかりなら、何もさう力むことはない、当分日本を御無沙汰して南洋で暮らしても悪くはないと、私はちよつと口笛を吹きたくなつて來た。ただ四季の変化が無いので歳の経つのが分りませんと、ユーイング夫人は言つてゐた。

二時間ほどして飛行場に戻ると、ラエからラバウル行の飛行機はアンセット・マルといふ会社のDC3である。もう機内冷暖房装置などといふものは無い。玩具のやうな扇風機が二つまはつてゐるだけで、汗がむやみに流れる。

はだしのお客がたくさん乗つて來る。三十歳くらゐかと思はれる女の黒光りのする顔に、縦にも横にもいつぱい青い入墨があつて、異様な感じである。

それでもオーストラリア人のきれいなスチュワーデスが一人乗務してゐた。

DC3はラエからラバウルまで、東京・京都間ほどの距離を二時間半がかりでゆつくり飛ぶ。

その間にコーヒーとビスケットのサービスがあつて、テーブルが無いから枕を台にコーヒーを飲んでゐるうち、私はどうしたはづみか自分の胸に熱いコーヒーをひつくりかへしてしまつた。右胸が赤茶色に染まつてまるで血染めの戦傷兵である。この恰好でラバウルに到着するのはあまり縁起がよくないと思つたが、手さげ鞆の中には着替へを入れてゐないのでやむを得ない。

間もなく話に聞くラバウルのシンブソン灣や、日本名を昔花吹山といつた火山などが見えて來、飛行機はぐるぐる旋回してラバウル空港に着陸した。

入国手続きがすんでタクシーに乗りこむと、運転手はは

だしの土人で、しかしそれよりも私は、そのタクシーがガタの来たタットサンであることに少し驚かされた。

ラバウルはほぼ南緯四度、ニュー・ブリテン島の東北端に位する港町である。

戦犯の抑留地として名高い西のマヌス島から東へアドミラルティ、ニュー・アイランド、このニュー・ブリテンまでの島々がいはゆるビスマルク諸島を構成してゐる。

ニュー・ブリテン島のラバウルから地図を南東に三百キロほどたざると、芋のやうなかたちをしたブーゲンビルの島がある。山本さんの死んだのは此の島だ。

そこからさらに南東に、チョイセル、サンタ・イサベル、マライタの島々、ベララベラ、コロンバンガラ、レンドバ、ニュー・ジョージヤ、ガダルカナル、サン・クリストバルの島々がほぼ二列に並んでゐるのがソロモン群島で、これらの島の名前には、戦争中の大本営発表でわれわれに古馴染みのものもかなりある。

ブーゲンビル島は地誌的にはソロモン群島の一部だが、政治上は現在ビスマルク諸島と共に濠領に入つてゐて「トリトリ・オブ・パプア・アンド・ニューギニー」と呼ばれてゐる。

ブーゲンビルのすぐ南の小島から先が英領のソロモン群島で、その中にはレンネル島とサンタ・クルズ諸島とがふくまれる。

ラバウルに私は二日滞在した。

ラエより少し大きく、そしてラエと同様美しい町である。戦争中はこの周辺に最盛期は二十数万、終戦時でも十万の陸海軍部隊が駐留してゐた。

しかし私は、昔ラバウルにゐたことのある中年の日本人たちがなぜあんなに、少し異常なくらゐラバウルをなつかしがるのか、やはりよく分らない。「さらばラバウル」と「ラバウル航空隊」と、現在でもなかなか人気のあるあの歌のせみではないかと思つたりした。

ホテルはあるが、バンガローみたいなものである。食事にも不味い。それでも部屋にはシャワーとクローラーがついてゐて、籠に自由に食つていいマンガやバナナが盛つてある。当時はこんな結構なことは無かつたにちがひない。山本元帥でも南東方面艦隊司令長官草鹿任一中将でもこんな暮らしはしてゐなかつただらうと思つて、私は不平を言はないことにした。

それからいろいろ考へてみた。

結局みんな、苦労したところどなつかしいのではないだらうか？ それにラバウルでは、少なくともガダルカナル

の如き凄惨な戦闘は行なはれなかつた。それからもう一つ、このやうに色彩の豊かな南国の風景は、大部分の日本人にとつておそらく生まれて初めて見るものであつたらう。だからこんな平凡な田舎の港町がひどく印象的で、未だに忘れられないのであらう——。(この考へをあつて私は訂正することになる)

しかし、ポインシアナ、ハイビスカス、ボーゲンビリヤと花は、十一月の末にもかかはらず——そんなことはあまり関係がないらしいが、とにかく花ざかりで、渚には波の音も聞えずシン普森湾は実に静かに美しい。

貸し車を一台借りて私は散歩に出かけた。

ここにもゴルフ場がある。誰もプレイしてゐる人はゐないが、花いっぱいときれいなゴルフ場である。フェアウェイの中ほど、大きなマンゴの木の下には、人間衛星のカプセル型をした日本海軍の鉄の機銃陣地が赤錆びて残つてゐる。何番グリーンかの向うには大きなコンクリートの古い防空壕が見える。

ゴルフ場のすぐとなりだが、さきほど私の着いたラバウルの空港で、ここは日本海軍の零戦や艦爆がたくさんゐたかつてのラバウル東飛行場である。山本五十六はここから死出の旅に発つて行つた。

そこからさらに椰子林の中の道を火山のふもとの方へ走

つてゐると、ふとひらけた草原があつて、「戦没日本人之碑」といふ石碑が建つてゐた。

「遺骨収集之地」

昭和三十年建之 日本政府」

と日本文字で書いてある。

石碑の側面には横文字で、

「イシカツ・ストーン・C.O. トーキョウ、ジャパン」

と書いてある。

芭蕉の葉がしきりに葉音を立ててゐる南海のこんなところで、青山の石勝にお眼にかからうとは思はなかつた。

でたためにまた田舎道を走つてみる。

時々土人に出あふ。互ひに手をあげて挨拶をする。私が日本人だといふことはすぐ分るらしく、年輩の男だと、檳榔樹の実を噛んで赤い、今人間を食つて来たやうな口に入るつこさうな笑ひをうかべ、

「コンニチワ」とか、

「サヨナラ」

「ゴクロー」

などと声をかけて来る。歯だけがまっ白である。

一度などはすれちがつたニッサンの小型トラックに鈴なりの土民たちが、

「ケイレイ」